

平成 30 年度前期終業式校長挨拶

皆さん、終業式ですね。学ぶ力、学力は身につきましたか。夏休み明け全体学活の時に学力とは、答えや結果を出す力ではなく、「正解のあり得ない問いに向き合う力」だと申しましたね。これは逆に言えば、学力とは「重い問いを発する力ということです。「どうしても問わなければならない問い」に目覚めているということです。

義務教育とは人間を人間にする教育のことです。自立した人間を育てる教育です。自立した人間と言っても、出来上がるんじゃない。どこまでも分からない人間に目覚めること（これが「自己」に向き合うことだと思います）、その意味でどこまでも分からない人間に帰ることです。問いに帰ることです。

義務教育は自立した人間を育てるという点からすれば、教師を必要としなくなるための教育とも言えます。だから諸君も、先生から与えられた問題を、先生から言われた方法で答えを出し、先生に評価してもらおう、というあり方から脱却しなければならない。そんな者が社会に出ても、上から言われた仕事を、上から言われたやり方でやって、それを上に評価してもらおう、という生き方しかできない。そんな人間を育てるのは教育ではない。それで、君たちにこう言いたい。

「教わる気になるな！問いも自分でみつけろ！」

それと同時にそれと正反対にことを言いたい。

「先生はえらい！」

君たちの小さな理解力には収まらない深い問いを考えようとしている、その一点において先生はえらいのだ。

「教わる気になるな！」と「先生はえらい！」は矛盾しない。自らの問いに目覚める時、そこに必ず先生が立ち現れるからだ。このとき先生は「師」となる。Teacher が Master や Mentor になる（この「師」は生きている師でもいいし、書物でもいい）。この「師」は何も教えてくれない。ただ道があることを示すのみです。

ところで夏休み明け全体学活で宿題を出しておきましたね。感情についてです。感情は人生をゆたかにしますが、他面大変やっかいな者です。そのうち強い感情である、怒り、悲しみ、喜び、喜びの中でもその強いものが感動になりますが、そうした怒り、悲しみ、感動について考えてきて欲しいと。どうですか、覚えてますか？

動物には威嚇はありますが、怒りがあるかどうか分かりません。苦しみはありますが、悲しみはあるかどうか分かりません。喜びはありますが、感動があるかどうかは分かりま

せん。しかしそれらが人間にはある。その意味で怒り、悲しみ、感動を考えることは人間とは何かを考える手がかりになるのではないかと思います。

それで皆さんに質問します。人間はどういうときに怒り、悲しみ、感動するでしょうか。そこに何か共通点はあるでしょうか。少し考えて下さい。周りの人と話し合っても構いません。

(生徒同士の話し合い)

では誰か意見ををお願いします。(頼りない記憶にたよって書いています。)

A: 怒りでも悲しみでも感動でも、自分一人ではできないと思います。他者との関係の中で感情は生まれます。がんばって結果を出せた時などを見たときに私達は感動します。

B: 僕も同意見で、他者がいなければそういう感情は起こらないと思います。

一なるほど。他者との関係の中で怒りや悲しみ、感動が生まれると。今は感情を他者との関係の中で考える流れになっているけれど、反論はないかな。

C: 僕は感情は無意識にでるものだと思います。他者との関わりの中で自分の思いが破れたときに無意識にわき上がってくるのが怒りなどの感情だと思います。

一なるほど。他には？

D: 私は自分の思いの方が先だと思います。怒りにしても悲しみにしても感動にしても自分の思いがあるから起こるんだと思います。

(拍手)

E: 少しずれるかもしれませんが、私は感情は人間のやる気のもとになると思います。

F: 僕は、感情は自己満足だと思います。自分の理解の中に収めているというか・・・うーん。

(なかなか説明できなくて困っている様子)

一誰か代わりに説明できる人いますか。

(何人か手が挙がる)

一じゃあ、君。

G: 感情は言葉に表して始めて感情と言えると思います。怒りなら怒り、悲しみなら悲しみ、そうでなければもやもやしたものだと思います。

—そのもやもやも言葉だね。でもこれは意見が分かれるだろう。もう時間がないので、これをみんなに聞いて終わりにしたい。感情というのは言葉によって理解して始めて感情になると考えるか、それとも言葉にならないから感情なのか。感情は言葉によって感情になると思う人。

2～3割の人が挙手

—言葉にならないものがあふれるのが感情だと思う人。

6～7割の人が挙手。

—はい。これからも人間を学んで下さい。終わります。

後出しじゃんけんの感想になります。感情は言葉にしないと自分がどんな気持ちなのかも分かりません。自分の感情を「悲しい」という言葉にできれば、「自分は悲しいんだ」と自分を客観化し、そうした自分を少しだけ認めることができます。これに対し言葉にできないような感情と抱えるというのは大変つらいものだと想像できます。多分、泣くことしかできないでしょう。言葉にすることで、そこに自分の言葉を聞く自分が立ち現れます。だから客観化できるのです。そうしてその自分を認めてあげることができるのです。

しかしこうした自己内での悲しみは閉じる傾向を持ちます。悲しいのは自分だけなんだと。誰もこの悲しみを分かってくれない、と。人間は自分の悲しみというものを聞いてくれる人を必要とします。悲しい気持ちを分かってもらいたいんですね。自分の悲しい気持ちを包んでくれるような大きな悲しみ、「大悲」というようなものに触れたいのでしょうか。音楽でもそうでしょうか？悲しいときに元気な音楽なんか聴くと返って落ち込みませんか。ふつうは聴きませんよね、そんな曲。悲しいときには悲しみを包んでくれるような曲を聴く。

こうやって人間は自分の感情を言葉によって表現し、また聞いてもらうことによって自分の感情として受け入れていきます。ですから感情というのは言葉にしてはじめて自分の感情になる、というのはどこまでも正しいと思います。ですが言葉に収まりきらないものがあるから人間は怒ったり、泣いたり、喜んだりして感情を外に表わすのです。収まりきらないのです。我慢できない。つまり人間は常に自分の思いで生きようとしますが、そうした思いでは収まりきらないものを抱えている、そのように言うことができると思います。ですから言葉に収まりきらないものがあふれるのが感情だとした諸君たちの考えも正しいと思います。

もちろんこうした理解もすべて言葉によってなされていますから、すべては言葉であるというのは一面においてどこまでも正しい。しかしその言葉の出所、「沈黙の場所」というようなものが我々をしてどうしても言葉にしなければならないように駆り立てている、そこに耳を傾けることは、発せられた言葉を理解することより、はるかに難しく、はるかに重要であるように思います。

(音楽でも音の出所、音の無いところ、スポーツでも技の出所、まだ行為が起こらぬ所、文章でも文字の書いてない所、そうした「沈黙の場所」に耳を傾けることが、形のあるものに囚われがちな我々にとって、形なったものを理解するより、はるかに難しく、はるかに重要であることは、合唱団の壮行会の時に申しあげましたね。)